

保護活動に参加意思のある住民の特徴 ー ツシマヤマネコ保護活動を対象にして

本田裕子

キーワード：住民参加、ツシマヤマネコ、長崎県対馬市

1. 本稿の目的

ツシマヤマネコ (*Prionailurus bengalensis euptilurus*) は長崎県対馬島にのみ生息し、環境省発表のレッドリストでは「絶滅危惧 IA 類」と、最も絶滅のおそれが高い生物と位置づけられている。生息数は 80 頭～110 頭と推定され、環境省、特に対馬野生生物保護センターが主導し、長崎県や対馬市等と連携して保護活動が進められている。また、環境省は飼育個体を野生下に放す野生復帰を将来的に計画している。保護活動や野生復帰計画の詳しい内容に関しては、ツシマヤマネコ BOOK 編集委員会 (2008) 及び自然環境研究センター (2009) を参照されたい。

筆者は、2009 年 1 月に対馬市および環境省対馬野生生物保護センターの協力を得て、対馬市全域住民を母集団に無作為抽出した 1,000 人の住民を対象に、ツシマヤマネコの保護活動及びツシマヤマネコの認識を把握することを目的としたアンケート調査を実施した。既に、単純集計については報告しており、住民のツシマヤマネコの捉え方は、「対馬にだけ生息する生き物」「対馬を象徴するもの」といった固有性が評価され、保護活動や将来的に計画されている野生復帰に関しても肯定的な回答が多いことを指摘した (本田ら, 2010)。

では、実際の保護活動への協力はどうなっているのだろうか。このように考えるのは、一般的に野生生物の保護活動の多くが行政主導であり、住民は保護活動に無関心であることが多いからである。しかし、保護対象の生物が野生下で生息して数を増やせるかどうかには住民の協力が欠かせず、住民の参加は野生復帰事業の成否に大きな影響を与えよう。ゆえに、住民を保護活動への参加に結びつけ

るにはどのようなことが必要となるのかを明らかにすることは重要である。例えば藤原（2003）は、今後の野生生物保護管理に住民参加の可能性を指摘しているが、同時に、現時点で、住民参加の実態の把握はまだなされていないと述べている。また、畑原ら（2001）は獣害対策となるパトロール事業のボランティア参加について、都市住民は参加意思があるとの調査結果を報告している。しかし、参加する人とその属性との関連性についての研究は未だ十分とは言い難い。

本稿では、先述した、長崎県対馬市の住民を対象に実施したアンケート結果を用いて、ツシマヤマネコの保護活動への参加意思のある住民の特徴の析出を試みる。なお、ツシマヤマネコの野生復帰事業は現時点では計画段階である点を踏まえ、ツシマヤマネコの保護活動への参加状況ではなく、保護活動への参加意思に着目する。

2. 分析にあたっての変数の説明

本稿では、先述した 2009 年 1 月実施のアンケート票から、「保護活動に何らかの形で参加する意思の有無」（以降、「保護活動参加意思の有無」とする）を従属変数とするロジスティック回帰分析を実施する。筆者は以前、兵庫県豊岡市の住民を対象に、コウノトリ（*Ciconia boyciana*）の野生復帰に肯定的な回答について、「年代」、「地域への愛着（定住意思）」、「環境問題への関心」、「長年飼育員をされた松島氏の認知」、「かつて／現在の目撃」との関連を明らかにした（本田，2008）。本稿では、独立変数として、（本田，2008）の結果をふまえ、同論文で有意となった「年代」、「地域への愛着」、「環境問題への関心」、「目撃（現在の目撃）」を含めることとした。また、基本属性である「性別」「出身」「居住地」「職業」に関しても検討を行なう。「出身」については、対馬島の出身であるかどうかに分け、「居住地」については、環境省がツシマヤマネコ保護に関して用いている対馬島の区分（対馬島中央部に運河として開削された万関瀬戸以北を上島、以南を下島とする区分）を援用し、下島居住、上島居住に分ける。「職業」については、ツシマヤマネコが森林を生息地とし、また、餌場として水田も利用

することから、農林業従事者と関わりがあることをふまえ、農林業従事か否かについての違いを検討する。しかし、回答者中、農林従事者は1割程度であり、分布に偏りがあると考えて、漁業従事者を含めた一次産業従事者として、農林漁業従事か否かで分類することとした。

さらに本稿では、ツシマヤマネコや保護活動に関する意識を変数に含める。ツシマヤマネコに関する意識を示す変数として「地域の象徴としての認知」を検討する。近年、コウノトリやトキ (*Nipponia nippon*) など、保護活動が地域振興と関連づけて展開されるようになっており、「地域の象徴やシンボル」としてツシマヤマネコを捉えることと、保護活動に参加意思があることとの関連を見ておく必要があると考えたからである。アンケート票から、『対馬の象徴』として最もイメージするものを単回答自由記述形式とし、ツシマヤマネコと記入したか否かで分類したカテゴリーを変数として用いる。

保護活動に関する意識を示す変数として、「保護に対する心配」や「保護に対する期待」、「野生復帰における責任主体」について着目する。「責任主体」については、アンケート票では、「野生復帰に関して誰が責任を担うべきであるか」という質問をしている。回答者自身を含めた「住民・市民・県民・国民」を主体として回答したか、それとも環境省や対馬市などの行政等と回答したかで検討する。以上、分析に用いる変数を表1に整理した。

表 1 分析に用いる変数

変数名	作成した変数
年代	2=20 歳代, 3=30 歳代, 4=40 歳代, 5=50 歳代, 6=60 歳代, 7=70 歳代
性別	0=女性, 1=男性
出身	0=島外出身, 1=島内出身
居住地	0=下島に居住, 1=上島に居住
農林漁業従事	0=非従事, 1=従事
対馬市への愛着（定住意思の回答）	0=愛着なし, 1=愛着あり
環境問題の関心	0=関心なし, 1=関心あり
目撃	0=目撃なし, 1=目撃あり
地域の象徴としての認知 （「地域の象徴＝ツシマヤマネコ」の 回答）	0=非回答, 1=回答
保護に対する心配	0=心配なし, 1=心配あり
保護に対する期待	0=期待なし, 1=期待あり
野生復帰における責任主体	0=それ以外, 1=住民主体（周辺住民・ 市民・県民・国民を合計）

3. 結果

結果は表 2 となった。「保護に対する期待」が 0.1%有意、「環境問題への関心」、「目撃」、「保護に対する心配」が 1%有意、「年代」、「性別」が 5%有意、「地域の象徴としての認知」が 10%有意となった。「年代」と「性別」は推計値が負値であり、若年層や女性であることが、参加意思をより高めていることが伺える。

影響度の高さを示すオッズ比を見ると、「保護に対する期待」が突出して高く、次に「環境問題への関心」が高かった。後は、「目撃」、「保護に対する心配」、「地域の象徴としての認知」がほぼ同程度の値となっていた。

表 2 推計結果

	(N=357)		
	Coef.	P-value	Odds Ratio
年代	-0.231	0.040	0.794
性別	-0.640	0.039	0.528
出身	-0.290	0.512	0.748
居住地	-0.045	0.882	0.956
農林漁業従事	-0.233	0.558	0.792
対馬市への愛着	0.253	0.525	1.288
環境問題への関心	1.541	0.007	4.671
目撃	0.966	0.001	2.628
地域の象徴としての認知	0.847	0.096	2.334
保護に対する心配	0.960	0.002	2.612
保護に対する期待	2.222	0.000	9.230
野生復帰における責任主体	0.363	0.265	1.438
定数	-1.544	0.061	

4. 考察

本稿では、ツシマヤマネコの保護活動に関して、何らかの形で参加意思のある者、ない者との間にどのような差異があるのかについて、ロジスティック回帰分析を実施し、検討を行なった。結果、「年代」、「性別」、「環境問題への関心の有無」、「目撃」、「地域の象徴としての認知」、「保護における心配」、「保護に対する期待」が、保護活動への参加意思を有意に高めることが伺えた。

「保護に対する期待」が保護活動参加意思に最も大きな影響を与えていたが、同時に、「保護に対する心配」も影響を与えていた。期待と心配の両方が、保護活動に参加する動機になるといえる。また、「環境問題への関心」も大きな影響を与えていた。ツシマヤマネコの「目撃」や「地域の象徴としての認知」も影響を与えていた。「目撃」には対馬野生生物保護センターで保護されているツシマヤマネコの目撃も含めているため、野生下ではなかなか目撃できないものの、センター等、ツシマヤマネコを見学できる機会を増やすことの重要性が示唆される。目撃機会の増加は、今後の保護活動の展開に必要といえよう。

また、今回の結果では、若年層で保護活動への参加意思を見ることができた。

通常、若年層は、保護活動に興味がない又は忙しくて参加できない等の理由で参加意欲は低いと想定されるが、ツシマヤマネコの場合には、異なる結果となった。保護活動への理解が若年層に浸透している結果ともいえ、若年層が参加しやすい形式での保護活動の展開が必要だろう。また、性別では、女性において同様の傾向があり、若い女性を対象にした保護活動を企画することも面白いのではないだろうか。ただし、若年層や女性を中心に、保護活動に関心のある人からの返信が多くなっている可能性も否定できない。今後より分析を深めていく中で明らかにしたい。

以上、本稿では、保護活動に参加意欲のある住民の特徴を析出した。野生復帰事業について言及すれば、住民の理解と協力を計画段階から得ておくことが重要であり、計画段階において、保護活動への参加意欲に着目した本稿の意義は一定程度あるだろう。今後、ツシマヤマネコの野生復帰事業が本格的に始動されると、当然、住民の意識にも変化が生まれる。加えて意識と実際の行動の間には乖離の存在がしばしば指摘されており、野生復帰実施後、住民が実際にどの程度保護活動に参加しているのかも含め、今後の継続調査による検証も必要といえる。

付記

本稿で用いたアンケート調査は、「対馬野生生物保護基金」の助成を一部受けて実施した。住民基本台帳の名簿閲覧・抽出を許可していただいた対馬市、アンケート調査にご回答いただいた皆様、調査実施や調査報告に関して多大なご協力をいただきました対馬市の玖須博一氏・前田剛氏、環境省の佐々木真二郎氏・水崎進介氏、東京大学農学生命科学研究科森林科学専攻特任研究員の林宇一氏に御礼申し上げます。

文献

- 藤原千尋(2003): 森林管理における市民参加論の展開－鳥獣管理への援用をめざして, 林業経済, 55: 17－24.
- 畑原祥子・丸山直樹・渡邊通人(2001): 農作物加害中・大型哺乳類追い上げ対策としてのボランティアによる追い上げ事業に対する地域農民と都市住民の反応, ワイルドライフ・フォーラム, 7(3): 81－84.
- 本田裕子(2008): 住民のコウノトリとの「共生」を受け入れる背景にあるもの－兵庫県豊岡市における放鳥直後のアンケート調査から, 野生生物保護, 11(2): 45－57.
- 本田裕子・林宇一・玖須博一・前田剛・佐々木真二郎(2010): ツシマヤマネコ保護に対する住民意識－対馬市全域住民を対象にしたアンケート調査より, 東京大学農学部演習林報告, 122号: 41－64.
- 自然環境研究センター(2009): 平成20年度ツシマヤマネコ保護対策実行計画策定業務報告書(環境省請負調査), 自然環境研究センター, 171pp(資料編含む).
- ツシマヤマネコ BOOK 編集委員会(対馬野生生物保護センター監修)(2008): <改訂版>ツシマヤマネコ 対馬の森で、野生との共存をめざして, 長崎新聞社, 167pp.